カップルサイクル

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カップルサイクル

【Ｎコード】
Ｎ３１１０Ｏ

【作者名】
風車

【あらすじ】
全ては「サイクリングがしてみたいのですが」という突然の提案から始まった。とある有名企業の社長令嬢であるお嬢様と彼女に仕える執事の会話集。

（前書き）

突然思い浮かんだ言葉から作るぶっつけ短編第二段！　今回は「サイクリング」です。最後には、どうしてこうなったという一言につきますな。

それではどうぞ！

「サイクリングがしてみたいのですが」

「え？　サイクリングって、あの自転車のですか？」

「えぇ、それ以外に何かありますか？」

「いや、まぁないんですけど……」

「なら、いいでしょう？」

「しかしですね……」

「何ですか？　言いたいことがあるのならハッキリ言ってください」

「お嬢様は、足が……その……」

「分かっているわ、車椅子生活を余儀なくされている私が自転車を漕げないことなんて……」

「なら、何故そのようなことを？」

「あなた、自転車乗れますよね？」

「え〝っ？

（なんか面倒なことになりそうだな……）

……い、いえ、乗れませんけど？」

「嘘ですね」

「いえ、本当ですとも！　いくら目隠しをしながらその場行進して立ち位置がずれなかったり、綱渡りできたりするほどバランス感覚がよくても、無理なものは無理です」

「ふぅん？」

「な、何ですか？」

「じゃあ、この前自転車で後輪だけで走行しながら、そのままぴょんぴょんするなんて離れ業を披露していたのはどこの誰だったのかしら？」

「そ、そんなダート自転車に乗った某ゲームの主人公みたいなこと、誰がやったんでしょうかね～」

「ここに、写真があります！　これはあなたですね？」

「ハッ！？　そ、それは……えっ、誰？」

「あなたでは？」

「これのどこが僕なんですか！？　酔っぱらってる変なオッサンじゃないですか！？」

「えっ？　違います？」

「違いますよ！　っていうか誰なんですか、このオッサン？　なんかよく見たら黒いぼさぼさしたもの持ってますし！？」

「それはカツラです」

「カツラ！？」

「そして、その人は消息不明だったあなたのお父様ですよ」

「父さんだった！？」

「さてと、こんなものは置いといて……ビリビリ♪」

「父さんが破られた！？」

「あっ、大丈夫ですよ。まだまだ沢山ありますから」

「そういう問題じゃないですよ！」

「あ、大丈夫。もちろん、あの人はリアルですから」

「余計にいら――……えぇえええっ！？」

「ということで、この話はおしまいです」

「え？　リアル父さんは？」

「あなたの臓器を売って借金を返そうとしたお父様なんて、探す必要ありますか？」

「いや、そんなどっかの執事みたいな経験ありませんよ！？」

「でも、あなたは私の執事でしょう？　それに、あなたを捨てたことは変わりませんよね？」

「まぁ、そうですけど……」

「そうです！　あなたは私といたほうがいいに決まっています」

「まぁ、そうですけど……」

「だから……もっと、ずぅーーっと！　私と一緒にいてください」

「まぁ、そう……え？」

「もう！　皆まで言いませんからね！」

「え、いや、その……」

「それでは話を元に戻します。今回の目的地ですが――」

「いえ、ですからお嬢様は足を悪くしておられるので、自転車は無理かと思いますが？」

「でもッ！　私はサイクリングがしたいのですよ」

「いや、でも自転車が――」

「あなたが漕げばいいのです！　あなたが漕げば、私はどこへだって行けます！　あなたがいれば……」

「え？」

「もう！　皆まで言いませんからね！」

「う～ん……分かりました。要は二人乗りということですね。そういうことなら、漕ぎましょう！」

「本当ですか？　ありがとうございます」

「いえいえ、お嬢様のためなら僕は何だってしますよ？」

「っ！？　そ、そうですか……」

「それで、目的地ですよね？　どちらへ行きたいのですか？」

「そうですね……。ではまず始めに、アメリカに行きましょう！」

「いやいやいや、いきなり海越えちゃいますか？」

「それでですね～、その後は……」

「聞いてませんね……」

「宇宙ですかね？」

「無理ですよ！？」

「あなたならできます！」

「そんなわけないです！」

「お父様とならあるいは……」

「父さんすごいですね！？　なんかもう人間の業じゃないですよね？　それ」

「さぁ今こそ、そのカツラを脱ぎ捨て、本当の力を解き放つのよ！」

「いったい、カツラで何を制限してるんですか！？」

「地球を三回ぐらい消滅させる力」

「なんですかそれ！？　そんな危険な力を酔った勢いで解放しないでください！？」

「その力はあなたにも宿っているのよ！」
「いらないですよ！？　そんなもの！」
「そう……残念ね」
「もう、真面目に考えてくださいよ」
「私は真面目に考えておりますわ」
「嘘ですね」
「嘘ではありませんわ！　今はあなたと話しているのが楽しくて、つい……」
「はい？」

「もう！　皆まで言いませんからね！」

「……分かってますよ」
「っ！？」
「どうかしましたか？」
「い、いえ別に……」

（まさか、本当に分かってるわけないわよね？）

「お嬢様？　顔が赤いですよ？　熱でもあるのではないのですか？」

「う、うるさいですよ！　私はなんともありませんから……」

「なら良いのですが」

「……」

（これが私の気持ちを知った上での行動なはずありません）

「それで目的地はどうします？」

「そ、そうですね……あなたは何かありますか？」

「僕ですか？」

「ええ、私はサイクリングがしたいのであって、別にどこかへ行きたいわけではないのです」

「なるほど……あっ！　そういうことなら、川に行きましょう！　川！」

「川ですか？　突然どうしたのです？」

「いえ、サイクリングと言えば川かと思いまして」

「で、どこの川がいいのですか？」

「タマ川です」

「タマ川ですか？」

「ええ、近場ですけど、サイクリングロードとかも整備されていますよ」

「たしかにそうですが、あそこは……」

「ねこもたくさんいますよ」

「さすがタマ川ね」

・・・

「たまに高級な貝の名前の主婦が来たりします」

「タマだけに！？」

「そうと決まれば、いつにしますか？」

「それでは、ちょうど休日なので明日にでも」

「かしこまりました」

次の日です♪

「くか～、すぴ～」

「あの～お嬢様？　いつも思うのですが、そのワイルドないびきはヒロインにあってはならないかと……」

「こぉ～、――っ！？」

「お、お嬢様！？」

「んにゃ～？」

「は？」

ドカッ！

「ぐわっ！？」

ドシン！

「わっ！？　わ、わわやや！？　て、敵ですか？　者共！　であえであえぃ！　……って、あなた何をやっているのですか？」

「せっかく起こしに来たのに、いきなり蹴ってくるなんて……」

「何をぶつぶつ言っているのです？」

「お嬢様ぁあああ？」

「ひっ？　い、いや～！　お助け～」

――しばらくおまちください♪

「さぁ、気を取り直してサイクリングに出発です！」

「おぉ～」

「どうしたのですか？　元気がありませんね？」

「当たり前です！　無理矢理あんなことされたら誰だってこうなります！」

「そうですか？　でも、ああでもしなくてはいつまで経っても大きくなりませんよ」

「うるさいですよ！　いくらなんでも無理矢理はダメです！　ああいうのは気持ちが大事なんです！」

「そんなことを言われても……」

「と・に・か・く！　ああいうのはお互いの意志確認をしたうえで――」

「しましたよ！　『はい、あーん』って」

「それだけでは何を口に入れる気なのか分からないんですよ！」

「そんなこと言っても最初はおいしそうに頬張ってたじゃないですか、ピー――」

「それはあなたのだったからですッ！」

「だったらなんで？」

「苦いのは嫌いなんです！」

「だからと言っても、食べないのは作った人がかわいそうですよ」

「だったら、あんなもの作らなければいいんですよ！」

「いや、おいしいんですけどね……ピーマン」

「あんな苦いだけのもの、どこがおいしいんですか！？」

「あの苦味がいいんですよ」

「苦くて、私が許しているのはお酒ぐらいです！」

「それはダメ！　お酒は二十歳になってから！」

「ケチー、ちょっとくらいいいじゃないですか！」

「法律には逆らってはいけませんよ！」

「ぶーぶー！」

「あっ、ねこですよ」

「いきなりの話題転換！？」

「いや～、もうタマ川に着いたようですね。やっぱり、お嬢様とお話ししているととても楽しいです」

「そ、そうですか？」

「ええ、何気なく流れていく時間も、お嬢様とお話ししているととても短く感じてしまいます。それゆえ、いつも考えてしまうのです。あぁ、時間がもっとゆっくり流れてくれればいいのに。もっとお嬢様とずっと話せていれればいいのに。と」

「……」

「実は今日、僕がここに来たかったのには理由があるんです」

「理由……ですか？」

「はい、お嬢様も薄々感じていると思いますが、今日はあの場所に行こうと思うんですよ」

「やはりそうでしたか……しかし、どうしてあの場所へ？」

「あの場所は僕とお嬢様が初めて会った場所じゃないですか？」

「そうですね」

「ですからあの場所へ行けば、自分の気持ちに整理がつくと思ったんです」

「気持ちの整理ということは何か悩み事でもあるのですか？」

「まぁ、そういうことになりますね」

「それって……」

「本当でしたら、僕がこんなことで悩むべきではないことは分かっているのですが」

「いいんじゃないですか？」

「はい？」

「私は悩むということはとても大事なことだと思います。ましてや、自分で悩むべきではないと思っていることこそ、もっと深く悩まなくてはいけないです」

「お嬢様？」

「今からあの場所に着くまでに、あなたの悩み事について悩むことを許可します！　それまで、あなたの悩み事について私はこれ以上言及しません。たっぷり悩んでください」

「……ありがとうございます。お嬢様」

「その代わり、向こうに着いたらちゃんと教えてくださいよ？　あなたの悩み事とその答え」

「もちろんです！」

そして、数時間かけてタマ川河口付近に到着♪

「いや～、着きましたね」

「そうですね……この橋の下で私たちは初めて会ったんですね」

「まさにタマ川アンダーザブリッジですね」

「あの日からもう一年が経つんですね……」

「早かったような長かったような、スルーされたような……」

「あの日の出来事がつい昨日のことのようです」

「お嬢様……」

「それで、さっきの話でしたね」

「はい」

「教えてください。あなたが何に悩み、そしてどんな答えを見つけたのかを」

「それでは、単刀直入に申し上げます。僕は……」

「……」

「お嬢様の執事を辞めたいのです」

「っ！？」

「僕は、お嬢様にお嬢様の執事としてしか見られていないことが嫌なんです！」

「はい？……それって？」

「僕は、お嬢様の執事としてではなく、もっと近い位置からお嬢様を支えたいのです」

「……それって、あなたが私のことを？」

「……み、皆まで言いませんよ」

「なんですか、そんなことですか」

「はい、本当に些細なことです。しかし、僕にとってはとても大事なことです。一年前のあの日からずっと……ずっと」

「でもそれは、私に恩返しをしたいと思っている気持ちではないのですか？」

「たしかに最初はそうでした。でも、お嬢様と一緒に生活するうちに気がついたんです。この気持ちは、きっと……」

「だったらなぜ、辞めたいなどと言うのですか？」

「言ったはずです。僕はお嬢様にとって、只の執事でありたくないのです」

「何を馬鹿なことを言っているのですか？」

「？」

「私には只の執事なんていませんよ？　私にいるのは世界で一番、優しくて、気の利いて、一緒にいるのが楽しい、私だけの最高の執事です」

「お、お嬢様？」

「私も今日は、あなたに言いたいことがあるんです。そのために二人っきりで外出ができるサイクリングをしたいと言ったんですよ」

「な、なんですか？」

「今日は皆まで言います。私は……あなたが好きです！」

「ええ、知ってますよ」
「ひどいですよ。知っているならそれらしい対応とかないんですか？」
「えっ？」
「むぅ……き、キス……とか？」
「はい？　い、いやいや、いくらなんでも確認もなしにいきなりはまずいでしょ？」
「それが今朝、いきなりピーマンを食べさせてきた人の台詞ですか？」
「まあ、そうなんですが……」
「じゃあ、私がしちゃいますよ？」
「そ、それも困ります……」
「では、どうするんですか？」
「わ、分かりました。……じゃ、じゃあ、目を閉じてください」
「……これでいいですか？」
「それでは行きます」

『……チュッ』

「え？」

「ど、どうですか？」

「どうも何もないですよ！　なんですか？　今時、ほっぺにキスって！？　このヘタレッ！！」

「んっ！？」

「そんなヘタレの唇は私が奪っちゃうんですから」

「お嬢様！？」

「ふふ、やっぱり皆まで言いませんからね！」

（後書き）

地の文入れたらもっと長くなりますよね？　自分のイメージを膨らませて読んでください。

第一段のスターダストは内容が分からないという意見が多かったので、もう台詞だけでよくね？　というノリで書いてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3110o/

カップルサイクル

2010年10月16日14時15分発行